

生きる身体の教育 武術家・甲野善紀との対話から (1) 歴史・物語としての身体

弘田陽介₁ 甲野善紀₂

On the education of "body-transforming" from Dialogue with Yoshinori KONO (1)

Yosuke HIROTA₁ Yoshinori KONO₂

Abstract

This report is the joint work with the Japanese martial artist, Yoshinori Kono, from point of view the education of "body-transforming". Hirota has participated in Kono's martial arts lesson and continued interchanging of the thoughts about body. As the result of long-term joint work, in this report we lodge a radical protest to the recent trend of educational reform to raise "the education to bring up the Zest for living" and "the boundary-crossing human sciences". Moreover we exploit the wisdom of educational philosophy through the Japanese martial arts (BUJYUTSU) and describe the essence of education, in order to bequeath the oral history of body, in the modern time when the life completely has become estranged from the body.

Key Words: the Japanese martial arts (BUJYUTSU), Zest for living, oral history, body

・はじめに 現在の教育と身体をめぐる現状

20世紀末から21世紀にかけての教育改革の流れにおいて、いわば「総合的な人間教育」の回復を目指す具体的な施策がいくつも導入されている。その中で代表的なものは、まず小・中高への、文字通りの「総合的な学習の時間」の導入であろう。そのような「総合」への傾斜は、初等教育から高等教育にまで幅広く及び、大学教育の再編・変革にも持ち込まれている。特に、あまりにも専門分化しすぎた医療教育の現場を、人間の全体を診察する場へと甦らせようとする契機として、文部科学省の高等教育局医学教育課のワーキンググループは、「コア・カリキュラム」という概念を持ち出してきている (*1)。この概念は、元々はヘルバルト派の学習心理学やアメリカの新教育理念に端を発するものであり、日本においては戦後の教師主導の教育改革において注目され、社会科という形で具現化されよ

1 徳島大学総合科学部

Faculty of Integrated Arts and Sciences, The University of Tokushima

2 松聲館 Shouseikan

うとしていた。この医療教育の変革案でのそれは、そのような教育史上の「コア・カリキュラム」の置かれる文脈からは切り離されているが、まさに「総合的な人間の教育」の系譜に置かれるものである。20世紀初頭の世界的な新教育の流行であれ、第二次大戦後の教育改革であれ、そこで問題視されていたのは近代という時代における科学技術と生活の乖離であり、総合的な人間教育こそがその乖離を繋ぎ合わせるものなのだという主張は、21世紀になっても変わっていない。すなわち、人間の生活とはますますかけ離れてきた21世紀の専門諸科学をコアとなるべき「総合的な人間の教育」によって統合し、新たな科学の実践の場として学校教育、大学教育を甦らせようということである。

このような「総合的な人間の教育」に関連するものだけではなく、21世紀の一連の教育改革によって、学校教育現場、大学教育、医療教育の現場では確かに変化が見られた。しかし、その変化は、現場の教師たちに混乱をもたらし、大学教育のシステムをより複雑なものにしたことは否めない。実際のところ、90年代以降の教育改革は、現場の教師を苦しめ続けた。度重なる上からの方針の変更で、教師は右往左往することになる。「総合的な学習」と今更言われても、ほとんどの教師にそのノウハウはない。この学習について、いくつかの実践例・成功例やマニュアル・ガイドラインは示されつつある。文部科学省も、『『総合的な学習の時間』応援団のページ』というHP（*2）をつくり、教師の支援に動いている。しかし、ほとんどの教師にとって、従来の学習の基準や成果方法が確立していない、この学習は面倒で厄介な時間に他ならないのである。株式会社ベネッセコーポレーション・ベネッセ教育研究開発センターが、文科省からの委嘱によって、平成17年3月から4月にかけて実施した「義務教育に関する意識調査」では、教師のこのような意識が吐露されている（*3）。総合的な学習の時間について、「このままでよい」という教師は31%、それに対して「なくした方がよい」という教師は58.5%にも上る。そうでなければ、文科省もわざわざその「応援団」を自称するHPなど作らないだろう。

教育現場のみならず、医療現場では臨床研修制度の変革によるいわゆる「医療崩壊」と呼ばれる諸現象など、人間科学の統合どころか眼に見える形で新たな亀裂が生まれてきている。文部科学省の指針や大学行政の関係者たちは、「総合」、「統合」や「横断」などの改革のキーワードを口々に叫ぶが、しかし現場では次々とトップダウン式・五月雨 式に送り出されてくる改革案件にどう手をつけてよいのか、悲鳴を上げているような状況である。

いったい何が問題なのだろうか。そもそもの細分化や断片化を埋め合わせようとして送り出された施策は、さらなる亀裂を生んでいく。総合・統合というキーワードが持ち出されれば持ち出されるほど、人々は自分の権益を守るために専門分化の「蝸壺」に入り込もうとする。結局のところ、目の前のひび割れを埋めようとする試みは、より大きな亀裂の存在を明らかにしてきた。その大きな亀裂は、小手先の改革・修正案ではどうにもならないものであるという意識は共有されつつある。細分化した学問ジャンル・学科をつなぎ合わせるべき、その総合の核＝コアとなるべき「何か」は、学校教育においては「生きる力」

と呼ばれるものであった。また医療専門教育においては、「生涯にわたり自ら課題を探求し、問題を解決していく能力」(*4)と論じられている。

「生きる力」は2008年の学習指導要領の改訂においても、引き続き強調されている。総合的な学習の時間の理念を支えるその言葉は、登場時、次のように説明されている。

「我々はこれからの子供たちに必要となるのは、いかに社会が変化しようと、自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力であり、また、自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性であると考えた。たくましく生きるための健康や体力が不可欠であることは言うまでもない。我々は、こうした資質や能力を、変化の激しいこれからの社会を[生きる力]と称することとし、これらをバランスよくはぐくんでいくことが重要であると考えた。」(文部省中央教育審議会「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」という諮問に対する第1次答申(1996)より。)

もちろん、このような言葉は誰にとっても頷けるものである。しかし、それはあまりにも都合よく多くを指し示し、陳腐になってしまった言葉であるために、実は何の力ももっていない。ここで「バランス」の取れた人間形成が重要視されているが、これは「バランスの取れた栄養摂取」というのとほとんど変わりが無い。教育改革において、あまりにも多くの言葉は示された。だが、それらの言葉はお題目として唱えられるだけで、私たちが直面している現代社会の亀裂に何ら功を奏するものではない。それどころか、この亀裂に対して私たちがあまりにも無力であるということを逆説的に示し続けているかのようである。このような現状に対して、どう応えていくべきか。

本稿の著者たちは、現状に対する応答として、身体教育という人間にとって最も基本的であろうものを提示する。このように述べれば、誰もが異議を唱えないだろう。いやそれどころか、「生きる力」同様に、「そのような当たり前のことはわざわざ言われなくてもわかっている」とさえ反論されてしまうかもしれない。つまり、「どんな人間でも身体をベースにして活動している。身体は大事である。人間の経験や仕事は身体によってなされるのだから」という論理は自明の常識と化している。だが、このような身体は、一般には知性ないしは精神の乗り物でしかない身体である。すなわち知性を円滑に働かせるためには、頑強で健康な身体、つまりは「機械」としての身体が必要なのだ。だから身体が重要なのである。しかし、このような論理では身体そのものについては何も省みられていない。ここでは、身体と心はつながっているとか、心身一如だとか極めて常識的な事柄しか述べられていないのである。さらに近年では、脳科学の進展により、脳がそのような心と身体の間を決定的に包括しているという言説が広く受け入れられるようになってきている。心といえ、身体といえ、やはりそれらすべては脳の機能によって規定されるという俗流の脳科学は、人間の心と身体をより確実な仕方で「機械」として捉えようとしている。

このような脳・心・身体を取り巻く言説状況において、身体教育とは、より心や脳を

健全に働かせるために行われる、機械のメンテナンスに過ぎないものとなるだろう。近年、小学校に導入された「体ほぐし」であれ、体育学に認知されるようになった「ボディ・ワーク」であれ、それらはすべて、ストレスの解消や健全な脳や心の働きといったものによってその効果は測定されるものなのである。また、学習指導要領の改訂において中学校の体育の時間での武道が必修化されることになった。だが、その武道とは、明治以降に創設され、スポーツ化された剣道と柔道であり、そこには近年の伝統という名でナショナルアイデンティティの高揚を図ろうという、いわば精神論的でそして政治的な思惑が見え隠れしている。

従って、現状を概観すれば、身体は、学校教育において心・精神ないしは脳として具現化される知性の視点でしか論じられてこなかったということである。1980年代より、日本でも身体論は盛んに議論されてきた。そこでは心身一如・人間における自然といった命題が取りざたされるが、それはやはり机上の議論に過ぎなかった。だが、この80年代から一人異彩を放ち、近年一般メディアにおいても注目されている人物がいる。武術を追求することで自らの身体において人間における自然を体認しようとしてきた甲野善紀氏がその人である。甲野氏は言う。すべての教育は体育であるべきだと。つまり、本稿の文脈に沿って述べれば、身体の教育こそがすべての学科の基底となるべき「総合的学習」ないしは「コア・カリキュラム」なのである。この言葉は、知性の乗り物としての身体ではなく、身体そのものの原理を武術を通して探究してきた甲野氏ならではのものである。

甲野氏は、そのHP上の紹介によれば、次のような略歴を有している。「1949年、東京に生まれる。1978年、武術稽古研究会松聲館（しょうせいかん）を設立。以来、他流儀や異分野との交流を通して、現在では失われた精妙な古伝の術理を探索しつつ、武術の研究を行っている。2003年10月31日同会を解散。2007年から神戸女学院大学客員教授を務めている」（*5）。近年は、その精妙な武術の術理が、一線級のスポーツ選手や指導者、そして介護技術者に取り入れられている。またNHKなどTVにも出演し、また朝日新聞社の企画で著名人が各地の小中高校で出前授業を行う「オーサー・ビジット」の講師も務めるなど、その独特の術理は広く世間にも浸透しつつある。弘田は、大学院生時代から同氏の講習会などに参加し、また2001年には京都大学で同氏の講演会を企画するなど交流を深めてきた。本稿は、2007年11月から2008年2月頃までに、甲野氏に教育をテーマにインタビューしたテープを元に、弘田が今回のテーマに沿う形で再構成したものである。また、その原稿に対して、再度、甲野氏が示唆的な文章を寄せてくれたので、それも織り込んでいる。本文中の引用指示のない箇所は次のようになっている。比較的短い鍵括弧は、甲野氏のインタビュー中の言葉、長文の引用となる鍵括弧は甲野氏が今回の原稿のために書き下ろした文章からの引用である。

また、本稿は大学の紀要論文でありながら、その内容は学術的な意味での体系性を有するものでなく、また記述も論理的に一直線に進むものではない。だが、それは本文中で述

べるように、既存の「学問・科学」に対する一つの抵抗のスタイルである。もしあちらこちらと渡り歩き、行きつ戻りつする語りから、読者の皆様に著者たちにとっても思いもかけぬものが伝わったとすれば、それはこの上ない幸いである。

・学校で何を教えるべきなのか 物語としての歴史

序で述べたように、「生きる力」を具現化するための総合的な学習の時間は、文科省レベルでは内容の空虚な理念として、そして現場の教師レベルでは「何を行ってよいのかわからない」面倒な時間として立ち現れている。だが、このような教科の体系性に拠らない学校教育は、教育史上においては特殊なものではない。そもそも近代学校成立以前においては、読み書き算数の名目の下、教科の枠付けなく様々な事象が混交的に教授されていたのだし、近代学校成立後においては、20世紀初頭の新教育に代表されるいくつかの教育運動で、総合的な生活学習が決まって持ち出されてきているのである。いわば、体系的な学校教育の反省点を補うべく、一種の原点回帰運動として、このような総合学習は教育者の関心を呼ぶものとなる。

さて、甲野氏も、総合的な学習が導入された頃の2003年に出版された本の中で次のように論じている。

「学校教育については以前から私は、小学校の頃は国語と歴史と体育をやるのがいいと思っています。国語は、日本でいろいろなことを学ぶ上で、さまざまなものを読み、また人と交流する際に欠かせませんから、どうしても要ります。

そして、あとの算数・理科・社会・図画工作などは、すべて歴史として、人類が有史以来どのようなところでどのようなことをして、何を作り発展させてきたのかを、物語として学ぶことがいいのではないかと思っています。そしてそれらの学習をより身につけ実感を持ったものにするために、体育があると思うのです。」（*6）

この甲野氏の発言は、まさに学校教育を再編するべく歴史上何度も注目されてきた総合学習と重なるものとして読める。ここでは、そもそもの学科という区分がもっている問題が指摘されている。ここで言われている国語とは、文学や詩の時間なのではなく、日本で生活し、学び、コミュニケーションをとるという日常的なスキルを身につけるためのものである。すべての教科に言語能力が必要なのであり、それはただ勉強に必要なだけではなく、過去の人々が残したものを読み、人と話し、何かを伝えるために必要になってくるというのである。ここで彼は、学校に総合的な学習を導入することに賛意を示しているかのように見える発言をここでは行っている。しかし、この発言は現行の学校教育に対する根本的なアンチテーゼとなりうるものである。彼はここで、総合的な学習を導入するのではなく、小学校のすべての時間を総合的な学習の時間にするように提言している。つまり、何か付け足すのではなく、根本から学校教育に異議を唱えようとしているのである。

そもそも学科・教科という区分は、教師にとって授業を運用しやすくし、また学校での学習時間を区切るための教育方法であり、便宜である。教科区分それ自体に意義があるわけではない。そのことを見抜いている子供たちはよくこのように親に抗弁するであろう。「算数なんか勉強して何になるの?」と。親は「計算できないと社会で困るでしょ」と言う。しかし、今の世の中でほとんど暗算は必要とされない。どこかで販売員の仕事をするとしても、計算はほとんどレジスターがやってくれるのだから。表向きはどんな教育者も学科の意義と効用を口にするだろう。しかし、それはどれも実際に学ぶ子供に届くものではない。みんなが同じように勉強しているから仕方なしに同じように勉強しているのである。この論理で突き詰めていくと、学校という制度もそもそも社会における便宜に過ぎない。特に情報に満ち満ちているこの現代社会では、若者は様々な知識を得ることができ、ほとんどの大学などはそもそもの理念から離れ、社会の便宜上の制度ともなってしまうている。

さて、このようなそれぞれの学科と学校制度を支えてきた学習＝効用観に対して、甲野氏はこう述べていたのである。すべての学科は私たち人類が辿ってきた歴史なのであると。なぜ今私たちがこのような生活をしているのか、なぜ地球上に飢えた人々がまだ存在しているのか。それらは数学や理科という西洋近代が世界中に流布した学問の中に一つの答えがあるのだろう。というのも、数学や理科の知見とは、元来は生産や富、資源の分配に関わる学問だからだ。そして、それらの探究はまたそれぞれの社会の歴史となり、私たちへと受け継がれるものを見つけることになるだろう。歴史は私たちを今の私たちにしている一つの物語なのである。

英語のhistoryという語が語源的には「過去を知ること」であり、またドイツ語で歴史を表すGeschichteという語は、「物語」という意味をも併せもつ。つまり、過去を知り、また後世に自らが生きた時代を伝える技法として、芸術や文学があった。そして、単なる事実ではなく、過去の人々が生きた物語としての歴史を学ぶことによって、私たちも何かを伝える術を知ることができるのである。

・身体の物語としての体育

こうしてみれば、勉強と遊びという区別も怪しくなる。勉強と遊びという区分は、子供が学校に入学することによって発生してくる。もともと子供にとって、そんな区分は関係のないものである。しかし、学校に入学することで、45分ないし50分の間、教師の言葉に集中することを覚えさせられる。つまり、勉強と遊びという区分は、実際には「教師への従属＝解放」という区分なのだ。この従属は、身体をコントロールに置くことを目的としている。同じ場所に、同じ姿勢で、45分間座り続けることを、学校教育は学習の前提とする。小学校入学前は、身体を絶えず用いて動き回っていたのを、入学後はその身体を止めることを要求される。身体を動かすという内からの欲求を押しとどめて、教師が話してい

ることに意識を向けることこそが、学校で求められている勉強ということなのである。

従って、そこで学ばれることに実感があるはずはない。ましてや「生きる力」などをはぐくむものではないだろう。ただの昔話として聞く物語や歴史は何ら人間にとっての力とにならない。元来、それらは身体に働きかけるはずのものである。というのも、物語や歴史は過去の人々が自らの身体で感じ、行動したことの総体なのだから。そのため甲野氏は、現行の学科としてのそれではない、体育の必要性も続けて論じている。

「ですから、その体育というのは、現在の学校体育とはよほど違ったものになります。体育とはいっても、山や海辺を歩いて木や鳥や雲や地形や岩石を観察する。そして、そこで火を起こしたり、木や竹を切ったり削ったりして工作をする。

すでに触れましたが、なにしろ現代は焚き火をするのにいきなり太い薪にライターで火をつけようとするような大学生がいる時代です。人間として生活していく上で本来最も重要な火の燃やし方も知らないというのは、どう考えてもおかしなことだと思います。そういう人間が、もし地震とか何かで電気やガスの供給が止まったら、全く何の役にも立たない、ただ足手まといなだけの人間になってしまうでしょうし、そうした非常事態に遭遇することがなくても、人として社会のなかでさまざまな人と交流し、自らの生き方を確立していくためにも、人として生きていく上で最も基盤となる生活技術をはとんど身に付けていないということは、さまざまな人間関係の対応にも貧困な発想と行動しかとれないように思います。」（*7）

現在では身体を使うことが、学校教育における体育、つまりスポーツに限定されてしまっている。だが、甲野氏が言う体育とは、「山や海辺を歩いて木や鳥や雲や地形や岩石を観察する。そして、そこで火を起こしたり、木や竹を切ったり削ったりして工作をする」ことなのである。自然を観察することも、図画工作にあたることも体育と言われると少し違和感があるかもしれない。確かに、スポーツの訓練や試合をすることで、体力を消耗し、身体は疲れを覚える。私たちはこのような活動に身体を用いている実感をもつのであるが、しかし、それ以外の活動では身体は用いられていないのでだろうか。いや、そうではない。甲野氏の言う体育とは、いかなる人間の活動においても自らの身体が関わっているということによりよく知るための体育なのである。

甲野氏は現在武術のみならず、様々なジャンルのスポーツの選手とも数多く交流を重ねている。それは各ジャンルで彼の身体運用法の実践的な効用が証明されてきたからである。その先駆者の一人であり、2008年の3月に引退を表明したプロ野球の桑田真澄投手は、甲野氏に次のように語ったという。

少年野球では、今でも守備指導では、とにかくどんなボールが飛んできてでも基本通りに身体をボールの正面にもっていけとコーチに教えられるという。「身体で受ける、中心で受ける」。これが基本なのだ。しかし、それではボールに間に合わず、追いつけないケー

スが多々ある。手をぱっと出した方が早いのもかかわらず、基本を守ることを重視させるのが日本の少年野球なのである。「基本を守れば、後々そのほうが上手になる」というレトリックは、学校教育においても数多く用いられている。日本的な型の伝承の歪んだ形である「基本」という言葉は、そのようなコーチたちにとっては子供がとっさに行う動きやその場で思いついたアイデアを退けるために存在している。「じゃあ、今間に合わなくてもよいのか」と甲野氏は言う。「それは交通事故で人が倒れているのに、赤信号だから出て行かないみたいなものでしょ。」

「ぱっと間に合う」ように動くこと、これが生活の技術である。火をおこすことや木を削ること、これらは現在、暗算がほとんど必要ないのと同じように、日常生活で行われないことである。火はライターやガスのコンロのボタンを押すことでつくだろうし、木なんて削らなくても必要なものはほとんど100円ショップか量販店で手に入る。だが、そのような日常が決定的に崩れたのが、そもそもの教育改革の起点となった1995年という年なのであった。いや、あれほどの大災害が起こらなくとも、機械仕掛けの日常は今やちょっとした地震や電気がただ止まるだけで失われてしまうのである。そのことを今、どれほどの人々が自らの身をもって自覚しているのだろうか。

よしんば、そのような非常事態に遭遇することがなくても、私たちの生活の基盤は非常に脆弱なものである。私たちは今、どのようにして自らの生活の基盤となるような近代的な都市生活が保たれているのかを知ることはない。電気にせよ、ガスにせよ、水道にせよ、また電化製品にせよ、パソコン、携帯電話にせよ、私たちはどのようにそれらが起動しているのかわからないまま生活を行っている。すべてはユーザーにとってボタン一つで操作可能となっているが、そのユーザーフレンドリーな外観が一枚剥がされれば、私たちは何を行ってよいのかすらわからなくなる。

このようにテクノロジーによって作り上げられた日常の上に、人間同士の日々のコミュニケーションも成り立っている。携帯電話を操るボタン操作一つで、友達は生まれ、友達を失うような日常が、子供にも今浸透しつつある。甲野氏が述べているように、さまざまな人間関係の対応にも貧困な発想と行動しかとれない」ということはやはり人間が人間として生きてきた基盤となる生活技術を何ら身につけていないということに起因しているのではないか。

・歴史と生活を体現する身体 そして現代における生活と身体分離

甲野氏はそもそも古の武術の技術や物語を、自らとは切り離された伝説ではなく、先人の生きた歴史として体現するべく、独自の術理を編み出し、自らの身体に変化を与えてきた。その物語は、例えば一日で江戸・仙台間を駆ける飛脚の話や、斬りかかられても何事もなかったように相手の懐から財布だけを抜き取り、川向こうにまで飛び越えたなど

という現代からは信じられない超人の伝説の数々である。それらの技がとても実際の出来事であったとは信じがたいが、しかしそれは現代の身体の常識からは信じられないだけであり、歴史の中では現代人とはまったく質の違う身体能力が養われていたのだと甲野氏は述べている。

「質の違う身体能力の典型例は、殆ど人に知られずに没してしまっただが、明治から大正にかけて奈良十津川に暮らしていた超絶的な身体能力を持った剣客、中井亀治郎である。およそ現代では世界中を探しても中井ほどの身体能力の持ち主はいないであろう。

中学時代に中井に剣の教えを受けた者が、後に上京して、剣道の大家といわれる人々と剣を交えても、中学時代の恩師には遥かに及ばない者ばかりだったと述懐している。それはそうであろう。中井の、その驚くべき身体能力は、次に紹介するような事を可能にしていたのだから。

中井は、剣の修業のために、崩落した山の急斜面に空の醤油樽を背負って登り、その樽をガレ場となった急斜面に転がす。当然、樽は凄まじい勢いで急斜面を転げ落ちて行くが、中井もその急斜面を転げ落ちる樽を追って、樽を棒で叩きながら一気に駆け下ったという。これがどれほど困難な事かは誰でも分かると思う。困難というより不可能であろう。急斜面を勢いをつけて転がる空樽は、落石に近い早さであろうから。

なぜ中井がこれほど人間離れた動きが出来たかということ、子供の頃から山遊びをし、猿を追って枝渡りをする事が大好きであり、しばしば藪の中を猪のように走る兄と共に猿を追いつめたという。その面白さがたまらず、長じてからも山中に行くのに、しばしば樹上の道を選び、何キロにもわたって土を踏むことなく、梢を渡る風のように枝から枝を渡って行ったという。

中井は自らの超絶的な身体の動きを楽しむ以上の野心はなく、郷里の中学校で剣を教えながら山仕事をして一生を終ったため、広く人に知られることはなかったが、その神技ともいうべき動きは、いまも十津川では語り伝えられているという。」

このような物語を、現代の人間はほとんど実話として受け取ることができない。自らの身体を鑑みる時、そんなことはとてもできないと考える。だが、その一方で、その身体が活動をしていた生活そのものが、現在と100年前ではまったく違っていたことは想像がつく。この中井ほどではないにしても、スポーツや格技では、生活の中で育まれた身体が活躍していた。

「たとえば、かつてプロ野球で一シーズンの約半分に登板し42勝といった、現在ではとても考えられないような勝ち星を挙げた西鉄ライオンズの故稲尾和久投手は、子供の頃から漁師である父に就いて櫓をこぎ、仕事で身体を造っていたことはよく知られている。他にも初代若乃花や名横綱と謳われた大鵬といった力士が、家計を助けるため肉体労働を行い、それで身体を造ったことも有名な話である。

現在、大相撲の世界ではモンゴル出身の力士が日本の力士を圧倒しているが、その最大の理由は、子供の頃から身体を使って家の手伝いなどの仕事や遊びをするという事が、日本では殆ど消え、モンゴルではそうした日常が、まだ失われていないという事であろう。」

このように現代から近い事例を見るにつけても、身体能力は現代の人々が常識的に考えるほど限定されたものではない。それは生まれついた環境、生活によって無限に開かれた可能性をもっている。だが、身体と、それを作り上げていた生活との乖離は今日この上なく大きなものとなっている。生活上で身体労働は必要最小限度のものとなり、その気になれば、物の投入・取り出し以外のほとんどのことは家電がやってくれる時代になった。甲野氏は単に古流の武術を稽古・研究するのみならず、現代の身体を取り巻く状況を鑑みた際、この生活と身体との乖離をこの上なく重大な問題として捉えるようになってきている。

「最近いろいろな分野の方々から要請を受けて、講演会や講習会などを行ない、つくづく感じることは、いま日本では人間として生活していく為の体育が崩壊しかけているという事である。

人間が人間として生活していくための体育とは何かといえば、物を持ち上げる、運ぶ、揃える、拭く、掃く、背負う等々といった、かつて殆どの人間が行っていた、日常生活を行なう上で自然と身につけていったはずの技術で、わざわざ教える以前に子供が言葉を覚えるのと同じように、その基礎は自然と身につけていた筈の技術である。

この問題を私が強く感じたのは、音楽家を対象とした講習会で、さまざまなジャンルの演奏家から寄せられる手や肩のシビレ、腰痛といった、一般には職業病と思われる症状の訴えを聞いて、私自身それらの楽器を持たせてもらい始めてからである。

楽器によっては確かに身体の一部を偏った姿勢で持つため、体に局所的疲労が出やすいものも少なくない。しかし、生活のための体育として物を持ったり、工作など物づくりのための技術を十分にこなしていれば、身体の一部に負荷をかけやすい動きであっても、その身体の一部を使いやすい動きを身体全体の動きにうまく連動させ、局所的疲労を相当に減らすことが可能となる筈である。音楽家などは怪我を恐れ、日常の仕事をしなない、などということを目にすることがあるが、そうしたことは大変な間違いであると思う。日常の仕事に習熟していれば、体に無理な負担がかかりそうな動きでも、身体そのものが思考し、体の使い方を工夫して偏った動きでも身体への負担が少なくなる道を探っていくと思う。」

ここで先に紹介した「すべての教育は体育であるべきだ」という言葉の意味が明確になってくる。いや、さらに言えば、すべての生活が体育なのである。文中にあるような肉体労働は、近代教育において知的な発育を損ねるものとしてほとんど排除されてきた。しかし、甲野氏が「身体そのものが思考する」と言うように、身体には身体の理がある。それ

を学ぶことは重要な生活、そして教育の根幹をなすものであるはずだ。

・物の原理・発見の原理としての歴史

だが、甲野氏の言う「生活技術」とは、単純に肉体労働によってのみ習得されるものではない。それは身体を通して物のそもそもの原理を知ることなのである。それは発見の原理としての歴史である。氏はよく講演などで車輪の歴史を例にあげる。蒸気機関という近代の発明品が、機関車という輸送手段に応用される際に、技術者は馬車の原理を適用して、機関車に脚をつけて動かすことを当初考えていたのだという。馬車についている車輪は、馬によって引っ張られるものであったために、他動的に動く車輪が自動的にどう動くのかと考えられることはなく、やはり脚で動かすことが当初構想されていたのである。それが車輪そのものが動くことで、機関車全体を動かすという発想に到るまでは様々な試行錯誤があったということになる。

車輪は私たちの日常にあふれている。しかし、この原理に着目しながら生きているということはほとんどないだろう。甲野氏がよく用いるたとえに、台車やベビーカー、スーツケースに用いられるキャスターの発見という話がある。キャスターは古くから製品化されていたように考えられるが、これが日本で用いられるようになったのは比較的最近のことなのである。車輪が動くことは誰でもわかるが、その台座が同じように回転運動することによって、それまででは考えられな いほどの利便性を得ることができる。キャスターが用いられるまで、ベビーカーはその場で方向転換をするためには一度持ち上げなければならなかったが、キャスターはそのことを可能にしている。キャスターを構成している部品の一つ一つは別段目新しいものはない。なぜこれを発見できなかったかというと、その原理に誰も気づかなかったからだろう。それは単に車輪の原理ではなく、様々なアイディアの組み合わせによって成り立っているものだからである。

このように、私たちが日常で用いている物も、その原理を突き詰めていけば、様々な発見が潜んでいるのだと甲野氏は考える。それは一つの確定的な事実ではない。それは発見である限り、過去からの時間の積み重ね、歴史であり、様々な人間が関わる物語なのである。また、すでに見たように、それは単なる知的な活動ではない。自らの身体を通して、また自らの身体における感覚を創意工夫して活用することで初めてそのような発見が引き起こされる。甲野氏はこれまで「四方輪」や「井桁崩し」といった独自の術理を生み出し、そしてそれらをまた新たに発見したのものによって更新してきた。その術理はただ単にひたすら武術の稽古をすることだけで形作られ、変化させられてきたものではない。そこには物づくりや自然・人間の観察など生活のあらゆるものが含みこまれている。それら事物、自然の事象・原理・歴史が、一つの物語として甲野氏の身体の中で結実した時、一つの術理という汎用可能な技術のまとまりが生まれてきたのであろう。

甲野氏が小学校で教えることを提言している身体の原理・歴史・物語とはこのようなものであり、その性質上、一つの学科・科目や一まとまりの時間に収まるものではない。この物語は一つのエピソードやある事実を確定するための実証的材料ではなく、あくまでそれはある一つの視点から仮説的に語られるものでなければならない。そして、その物語は他の物語と繋がっていく。甲野氏はこのことを「蓮の葉」のようなものだと語っている。蓮の葉の上には細かい毛が生え、さらにその毛が分岐している。つまり、どんどん物語はいろんな方向に分岐・拡散・連鎖するものであり、そのつながりこそが発見を生む。甲野氏はこの「蓮の葉」のたとえで発見がどのように生み出されるのかを話しながらも、「だから蓮の葉は水をはじくんですよ。この原理は防水・防汚性の塗料とかにも使われている」と別の方向へと話を展開させていった。

また「こころの時代～宗教・人生 『身体からの探究』」として2007年12月2日にNHK教育テレビで放映されたインタビューがあった。そこで、甲野氏は、身体の一部を起点とする動きではなく、身体の複数箇所を同時に活用していく自らの術理を、「力の出所をなくすんですね」とコメントしたアナウンサーに対して、「曇りの日はお日様がどこにあるかわからないでしょ」と絶妙のたとえでもって応えている。甲野氏はこのようなたとえを開発していくことは、技の進展に大いに資するところがあると考えている。ある技をあるたとえで語り、自分で「ああなるほど」と納得する。さらにそのたとえにより忠実になるように身体を動かしてみると、また新たな発見が生まれてくる。

そもそも自らの技を説明するために様々なたとえを持ち出すことは、学校教育的にはあまりに話が広がりすぎ、まとまりを欠くように思われるかもしれない。しかし、かつての学校の教師もこのような語りのスタイルを有していた。「脱線」とそれは呼ばれたが、それは不思議と子供の心に残るものであった。甲野氏は何かについて話しながら、そこに伝え方、たとえ話の、そしてつながりの発見を行っているのである。実際に彼の武術の稽古会はそのような形で進展してきた。彼が生み出してきた数々の技法は、講習会などで語り、伝え、参加者とやりとりをする熱の中で生まれてきたものである。何かを伝えようとする師が話しながら、自分の中で生まれてくるものについて興奮する。そこに情熱が生まれ、教わる側は引き込まれ、巻き込まれて行くのだ。授業や講習会という空間では、教師は同じことを話しながらも、どんどんその授業の展開が変わって行かなければならない。そうすることで教え方がどんどんうまくなっていくと同時に、その教師も持っている知見が一見関係のなさそうなものとなつながら、別の平面の中でそれらが捉えられることになる。実は本稿もこのような原理によって成り立っている。

このようなつながりの発見を、甲野氏の技の進展に重ねて論じるならば、次のようになる。すなわち、技はそれを伝える以前にそのまま存在するのではなく、伝えていくうちにその技自体が変わってくるということなのだ。また、たとえ話が変わって行くことで技の効果が変化してくるし、他の技とのつながりが出てきて、さらなる汎用性が見つけられる

のである。

甲野氏がかつて発見した術理に「井桁崩し」というものがある。それは、肘という扇状もしくはワイパー状の開閉運動する部位の動きを止め、両腕と指先、そして胸で形作られる空間を井桁(平行四辺形)に見立て、その変化によって力を生み出すというものである。日常の動きでは、肘は扇状のヒンジ運動にしか用いられていない。しかし、その肘の動きを止め、そこに「井桁」というたとえ、ないしはイメージを持ち込むことでまったく質的に違う動きを生み出そうとしている(*8)。

この論理は、不思議なものとして受け取られるかもしれない。なぜなら、技とは相手に対する以前に、個々人の工夫や努力で上達すると一般的には考えられているからである。もちろん、一人稽古も必要である。しかし、武術の技はそもそも人間関係の技術なのである。元来、自然や人間と関係しない技はどこにも存在しなかった。武術の技であれ、職人の技であれ、教育の技であっても、すべてはある人間が事物や他者に関わる技なのである。

また、すでに述べたように、教師が伝えようとする学校の学科も、そもそも人間が自然や他の人間と織り紡いできた技なのである。その伝達の最大のポイントは、伝えて行こうとする人間が、それを本当におもしろいと思えるかどうかである。そのようなおもしろさが相手を巻き込んでいき、その空間に熱を生んでいく。

・教育における情熱とは

さて、「はじめに」で述べたように、教育の制度には近年様々な変革もたらされた。しかし、その教育を支えるはずの教師の情熱はいかなるものであろうか。別に熱血教師がよいというわけではないが、子供を巻き込み、夢中にさせるのは教師の情熱であろう。そして、教科学習であろうが、総合学習であろうが、第一に肝心なのは、教師が伝えたいと考えている事柄に対する情熱である。教えたことにどれほどのめり込むことができるのか。甲野氏はそもそもの問題の所在をそのような情熱の有無に見てとっている。

「世間ではよく、辛い稽古に耐えてこそ花が咲く、というような言い方をする。確かに。それはそうかもしれない。遊びたい！練習を放り出して休みたい！というのを我慢して、稽古、練習を続ければ、それ相応の成果は得られ、花も咲くかもしれない。

しかし、それはあくまでも、その我慢相応の花だろう。しかし、芸術、それも絵画などの分野で苦しさで耐えて努力した結果、余人がとても描けないような素晴らしい絵が描けたというような話は、およそ聞かない。それどころか、その絵を描く画家が迸る情熱の発露として絵筆をとり、その情熱の赴くままに、時に自らの生活の危機も、身の危険も顧みずに描きあげたという例が少なくない。

音楽においても、クラシックの名演奏家のなかには、幼時遊びたいのを親に無理やり楽器の練習をさせられた、という思い出を持つ人物もいるかもしれないが、音楽本来の在り

方としては自らの思いや情熱の発露である筈だ。それは、ある人が『ジャズに学校が出来た時、ジャズの本質が死んだ時だ』と語ったことからも知ることができると思う。

このように、芸術においては、努力して、練習、稽古するということの価値が全く高くないのにも拘わらず、なぜか武道やスポーツでは苦しい稽古、練習を積むことは、最大の美德であるように言われている。

大相撲の中継などを観ていると、力士の間接的敗因は大体“稽古不足”ということになっている。この抜きがたい日本社会全体が持っている“稽古は辛いもので、それに耐えてこそ成功の花が開く”という考え方が、どれだけ多くの才能を潰し、体を壊し、仲間を敵視し、トラブルを生んでいるかわからないと私は思う。

無理やり我慢して、というのは必ず反動を生む。禁酒時代のアメリカは、外国に出た船員がよく泥酔して騒ぎを起こしたというし、酒がマフィアの暗躍のネタのひとつになった。またシンガポールは道路に唾を吐いても罰金を取られるほど、街を清潔に保つ締め付けがきつい、そのためか、シンガポール航空の乗務員が日本のホテルに泊まった時の汚し方、散らかし方は目に余るものがあったという。

スポーツなども健全、清潔をスローガンとしているが、その内実は陰湿な“いじめ”や嫉妬が渦巻いていることが多い。どんなに強い権力や怖い脅しで努力を強いても、その人間が心底興味と関心を持って取り組む情熱には到底敵わないだろう。それは飛行機を発明したライト兄弟のエピソードを考えてもわかることである。当時の常識では不可能と、完全に否定されていた空を飛ぶ乗り物を、誰に依頼されたわけでもなく短期間に作り上げた業績は、燃えるような情熱があったからであろう。

何故そうした新しいものを作り出そうとする情熱を燃え立たせるような指導で、スポーツ等も指導する指導者がいないのか、私には不可解でならない。

ここで私自身の事を書くのは、いささか気がひけるが、私自身は、もし事情が許せば、それこそ一日中稽古出来るものならしていたい。なぜなら、身体の微妙な使い方の工夫というのは、尽きぬ興味のあるものであり、それがある程度分かってくれば、食事と睡眠以外のすべてを稽古と、それに関連した術理の研究にあてて、まったく飽きるという事が無いからである。

私など、一番望ましい休暇は、緑の綺麗なところで、いろいろな事に煩わされることなく、思う存分自分の納得のいく稽古をする事で、稽古をしない休暇などは全く欲しいと思わない。

ただ、普段は様々な用件に追われ、なかなか稽古に時間がとれないだけである。したがって、稽古や練習を熱心にしたという事が褒められる、という事が理解できない。練習はやりたくて堪らなくてやってこそ質の違う身体能力が身につくのだと思う。」

学校の教師が、近年の制度改革で結局のところ得たのは、書類やその他諸々の面倒な手

続きであった。そもそもの情熱はその手続きの中で消えていく。その空いた場所に入ってくるのは、客観的な尺度・目に見える成果といったものである。こうして学校教育に馴染んだ人間は、本稿が述べるような、教えられるべきものは「ある一つの物語」なのだという話に対しては批判的な見方を採るだろう。一言で言えば、ほとんどの学校の先生は、自分たちが教えているのはこの世界を動かしている客観的な事物の真理や、出来事のありのままの事実だと自負しており、それらは「物語」・「たとえ話」では断じてないと確信をもっている。国語で扱う小説であっても、体育であっても客観的に分析でき、また科学的に実証され、体系づけられたものであると考えている。だから、事実を認定し、確定する科学的な教育と、一般的に主観的で自由に展開される物語は馴染まないということになる。

・「伝わるもの」としての身体史・物語

ここまで総合的・統合的な教育という問題を入りに、学校教育とは異なる別の教育の論理を、甲野氏とともに探ってきた。そうするうちに決定的な問題の所在が明らかになってきた。それは学校教育を貫く科学という思考法である。別稿でそのことはさらに考察を深めていきたい。

また身体、そして生活の物語としての教育という本稿の主題に絡めて、甲野氏は過ぎし世の人と人との関わりのあり方を存分に物語ってくれているエピソードを紹介してくれている。やや長文になるが、そのまま引用も含めて、ここに所収したい。

「教育とは、人それぞれのなかにある特質を認め、それを発揮させるところにある。したがって、すぐれた教育者とは、自分が自分の方式をもって人を教えるだけでなく、自分の方式とはまったく別であっても、すぐれた才能を持った者を認め伸ばすことが出来る者のことを指すように思う。

この事に関して、筆者は最近見事なエピソードを知ったので、そのことについて紹介したいと思う。

その見事なエピソードとは、かつて世界中で最も精妙な木工技術が栄えた日本で、そうした世界を荷った大工・建具職をはじめとする木工の職人、工芸家の厳しい要求のなかで、それら木工職人達の憧れの的の工具、すなわち鑿・鉋をはじめとする様々な木工刃物を鍛って、不世出の名人と謳われた道具鍛冶、千代鶴是秀に関するものである。その千代鶴が、ある自分より遥かに若く、作風も千代鶴のような大工道具が美術工芸品として高い評価を得たものとは全く異なる、実用一点張りの道具鍛冶を評した話が『千代鶴是秀写真集②』に載っていたので、その部分を次にかいつまんで解説し、かつ引用してみたい。

その実用一点張りの道具鍛冶とは、清忠銘の鑿を鍛っていた鳴村幸三郎という鍛冶職人である。幸三郎は、火造りの技術に秀れ、手早く切味のいい鑿を打つことで評判になっていた。しかし、仕事が早く切味もいいのだが、仕上げが大雑把で、その刃味に見合った仕

上げを望む声が少なからずあったのだが、本人にはまるでその気がない。

そこで、千代鶴是秀とも親交があり、嶋村の腕を惜しんだ土田一郎という人物（『千代鶴是秀写真集②』の文章を担当した土田昇氏の父君）が、嶋村幸三郎を千代鶴と対面させ、何がしか千代鶴の影響を嶋村に与えようと計画し、二人の対面が実現するのだが、その時の是秀の嶋村評の見事さを是非味わって頂きたい。そこを浮き彫りにするため、多少長くなるが、その前後を含め、『千代鶴是秀写真集②』（*9）から引用してみたい。

——もし、嶋村が作ったノミの刃物としての内容が凡庸なものであれば、その負の要素<仕上げが大雑把だという事>は、負の要素たりえぬほどに、清廣系鍛冶技術内に埋没し、清廣-清忠というノミ鍛冶系列は、無理のない継承系と化したはず（*10）。<しかし、そこには納まりきれない>これだけ優秀な切味を示す刃物であるのだから、形状や成形精度をどうにかしてみたい、とは、土田一郎に限らず、嶋村親子とつきあいはじめた販売店は、誰もが思ったはず。

しかし、忠五郎も幸三郎も、千代鶴是秀や石堂秀一や廣貞はおろか、左久弘や市弘や正芳にすら、追いつき、追いこそうなどという野心はまるで持っていなかったのです。もちろん、最大の取引販売店である水平屋に、市弘が作ったノミを見せられて、どうにか似せたものを作れと言われれば、引受けます。しかし、それまで通りの技術内で、それまでと大差ない制作時間内ですませてしまうのですから、似て非なる形状、精度にしかいたりません。そして確かに使用上はそれで充分なのです。

『使えないわけじゃないのだから、これでいいでしょう。もっと丁寧に言うんだしたら、中野（市弘ノミ製作所）に持って行ってよ』などと決まり文句を用意していて、嶋村親子の製作姿勢は磐石なまでに不変なのです。

そこで、土田一郎は、直接、千代鶴是秀という名工を、嶋村幸三郎に紹介し、会ってもらう事で、何かしらの変化を期待する事になります。是秀が七十六才、嶋村が二十才なかばでした。

『会いましたよ。よく覚えているよ。でも、オレも若かったからなあ。千代鶴さんが何を話してくれたのか、さっぱり判らなかつたよ。話してくれた事の内容を忘れてしまったのではなくてね。千代鶴さんが何を意図し、何を言いたかつたのか理解出来なかつたんだよ。今でも良く判らない。だってね。鍛冶屋についての話も出ず、鍛冶仕事についての事も、全然話題にならないんだもの。何を話してくれたかって。それがね、漠然としたものばかりなの。お茶の話とか、季節の花の話とか、まるで、仕事を引退した老人二人がかわすような話ばかり。だから、ずいぶん長い時間おじゃましていたんだけど、後で良く考えてみると、自分がどうして、千代鶴さんに会って、話を聞いたのか。その理由も意味も、よく判らなくなっちゃって。

でも、千代鶴さんはやさしい人でしたよ。まだ、ろくすっぽ仕事も出来ないような若造を相手にして、ニコニコしながら話をしてくれたのだから。ああいう人も、鍛冶屋では珍しいよね。売れるだ、売れないだ、切れるだ、切れないだ、そして、自分の作った作品の自慢をするのが、職人話の相場なものね』

と嶋村は回想しています。そして、土田一郎は、嶋村幸三郎と会った是秀が、鍛冶技術についての伝授も、指示もせず、ころえも与えぬままの会談を終え、数日たった後、嶋村というノミ鍛冶に対しての評を、是秀より直に聞かされます。

『土田君、ああいう鍛冶屋を大事にしなければいけません。いい鍛冶屋ですよ。欲もなく、出しゃばらず、正直で、話をしても気持ちがよかった。あの人柄であれば、仕事が下手であるはずがない』と、いわば手離して誉めていたという事です。

土田は、千代鶴是秀の言いつけ通り、平成十八年五月、嶋村幸三郎と息子、清忠が鍛冶を廃業するまで六十年近く取引する事になるのですが、是秀が誉めたところの嶋村の鍛冶としての心眼の良質さに気付いてゆくのは、是秀が亡くなった昭和三十二年以降の事と言えましょう。

『水平屋では、ノミは市弘が作るもののように肩を張らせて、薄手に作れと言う。土田さんは肩をなで肩にして、厚手に作れという。全然反対の事を言うのだから、作る方は、作りにくくてしょうがない。今は電動工具があらかた加工した後、ノミを使うわけだから、叩ノミも大入ノミも薄手な方が使い易いんじゃないの。それとも、土田さんのところに来る大工は、みんな電気が通ってないところで仕事してる人ばかりで、厚手のノミが必要なのかね。土田さんが言うようなノミを作ろうとすると、地金もひとサイズ上の厚いものを使わざるをえないんだよ。厚ければ、火造りの時も焼入れの時も、赤めるまでに時間も燃料も、たくさん使わなければならぬわけだから大変なんだよ。手間を倍もらってもあわないよ』

そんな愚痴を、真正直に口にしつつも、嶋村幸三郎は、面倒な販売店違いの作り分けもしてくれ、また、倍の価格設定の特注品にすべきところのものでも、ころもち高価にした程度の値段で納品してきます。土田一郎が

『清忠さん（嶋村幸三郎さんを指す）、うちも面倒をかけているのは判っているのだから、かかっただけの手間を取って下さいよ』

ともうし出ると、嶋村は

『そんなに高くしちゃったら、大工が買ってくれなくなっちゃうよ。うちは、千代鶴でも、石堂でもないのだから、あまりびっくりさせるような値段をつけたら、世間に笑われちゃう。それより、なんで水平屋で評良く売れるものなのに、土田さんは気に入らないのかなあ。本当は、大工が、肩のだれたものや厚手のものを欲しがっているわけじゃなくて土田さんだけが、そんなものが良いと思っ込んでいるだけなんじゃないの』

と見すかすように、痛いところをついてきます。

確かに土田一郎が要求するところのものは、千代鶴是秀作品を理想にすえた土台を持ち、それはとりもなおさず、ノミにおいては、重房や幸道や国弘という、戦後の昭和期からは、あまりに遠い過去の名工達の、すなわち、忘れられてしかるべき者達が作りあげたものの、再現を意味する事となり、使用者たる多くの大工が、異和を感じる程に、とんと見かけぬ、流行遅れには違いなかったのです。

嶋村幸三郎は、火造り工程において、鮮やかな腕前を有しているだけに、文句を言いつつも、その流行遅れなものを、実用品次元の仕上がりと速度で作り上げていってしまいます。そして、重房や幸道や国弘など、聞いた事もなく、千代鶴是秀の作品を見た事もないような使用者の中で、調整技術にたけた者の一部が、過去の名工達の工夫と研鑽のたまものたるところのものを、再発見してゆく事ともなるのです。成形が上手というわけでも、ウラスキ精度が特別良いわけでもなく、しかし、なぜか切味、使いごちが良いノミ。突いても叩いても、軽く木にもぐりこみ、堅木に敗けず、掘りくずしてゆくような、ハードな作業においても、曲がりや狂いを生じないノミ。それは卓抜な火造り技術にささえられた刃物の質と、過去の名工が悩みぬいて発想していった形状の出会いであり、また均衡を保った融合でもあったはずです。『清忠のノミは切れる』との評は、鋼がうまく鍛えこまれている事を意味するとともに、火造り技術の卓抜さを、嶋村幸三郎の人柄の良さが、おおらかに作用していたからこそ成立していったものであると思います。是秀が評した「仕事が下手であるはずがない」人柄の良さは、忘れさられた過去のものを飲み込んでしまうだけの度量を備えていた事になります。——」

甲野氏は明治から昭和にかけての稀代の道具鍛冶、千代鶴是秀にまつわるエピソードを紹介している。彼と親交があった土田一郎は、嶋村という職人としての腕を十分に持ちながらも必要最低限の仕事しかしてこなかった男を、千代鶴に引き合わせ、嶋村に何らかの変化を期待した。千代鶴はざっくばらんにいろいろな話を彼にしたが、仕事の話は何も出ず、嶋村はその一連の話を「さっぱり判らなかった」と述懐している。だが、土田が企図したようにこの二人の間には何かしらの「伝わるもの」があった。それは、流儀や方式が違っていたということもあり、直接の指導というわけではない。だが、二人の間には、この当の二人が自覚していたわけでもないような「伝わるもの」があった。千代鶴は土田に、嶋村を評して、「あの人柄であれば、仕事が下手であるはずがない」と語ったという。千代鶴は嶋村を認めた。このことが嶋村に何かしら伝わったのであろう。そうして、嶋村の作るものにも変化が見られるようになる。土田一郎の息子・昇が書いているように、そこには流行遅れの古の名工の道具が現代の実用品の体裁をとって再現されているのである。その道具は、それを用いる腕の確かな大工に、かつての名工たちが培い、担い続けたものを、さらに伝えるものとなっている。そのノミは、「なぜか切味、使いごちが良い」のだと評

される。そこにはかつての名工から嶋村に到るまで確かに担われ、そしてそれをを用いる腕のある職人によって再発見され、語りなおされる「歴史・物語」が存在している。このような物と身体の技と人のつながりにこめられた「歴史・物語」を何らかの形で伝えていくこと、これこそを教育と呼ぶのではないだろうか。それを伝える語りは、直接的なものではない。何か伝えたかったものが伝わるわけでもない。だが、人は誰かが認めるその方向によって、そのあり方を変える。これをこそ教育というのではないか、甲野氏は千代鶴のこのエピソードからこのように物語っているのではないだろうか。

・結びにかえて

本稿では、ここまで現在の教育改革における問題点——人間全体を包括するような教育および学知の欠如とその対応策である総合的な学習などの導入——の考察を皮切りに、教育という営みにおいて著者たちが追求したいものを描き出してきた。ここまで読んでこられた方々にはお分かりいただいたと思うが、本稿の論旨はほとんどの現行の学校教育内容と科学知を標榜する諸学問ジャンルに対する過激なまでの異議申し立てによって担われている。従って、なかなか読んでいただく方に素直に受け入れられるとは思わないが、だが、もし今も文部科学省が推進するような「生きる力を育む教育」が子供や若者に必要と考えられるならば、一度は様々な常識的な事柄に逆らう形で本稿の論旨について想いを巡らせていただきたいのである。

「科学」的と称される思考様式に対する異議申し立てについては、続稿となる原稿においてさらに論を進めていきたい。ここでともかくも述べたかった事柄は、教育という営みにおいて人間同士、そして人間と自然との深いつながりに触れたいとするならば、科学的な人間観、論理性、または方法的なテクノロジーの研究以前に、その教育を支えるものとして、脈々と受け継がれてきた歴史・物語の営為を取り戻す必要があるのではないかということである。この「物語」に含まれるものは、画一的・一義的・因果論的に説明できるものではなく、かつての禅問答や宗教書のように、様々な方向に拡散し、また矛盾を孕む複雑なものである。このような矛盾を孕んだ拡散性・多義性は、学校教育のように一時間・一日・一年という区切られたスパンで直接的に学ばれるものではなく、何らかの契機をきっかけに長い人生の中で間をおいて、偶発的に経験されるものだろう。それは学校教育に期待してはいけないものと言われるかもしれない。しかし、人間の根本に関わるもの、つまり「生きる力」と称されるものが教育の最重要課題とされる今日において、本当に長いスパンで学ばれ、経験されるものが、子供にとって、そして大人にとっても必要なのではないか。

甲野氏は言う。「武術を通して、人間の運命は完璧に決まっているが、人間は自由だということを追いかけていきたかった」のだと。運命と自由という相矛盾するあり様を共に調和させ、生きる力に変える身体物語としての武術。それが甲野氏の追求する歴史であり、物語なのである。また、氏が本稿最後に紹介した、千代鶴是秀と嶋村幸三郎の間の物語は、

それは長く受け継がれてきた鍛冶職人の歴史の物語であり、それを担う身体と技の歴史の厚みが織り成すものである。このような物語は、もちろんすぐに役立つ人間関係や教育の how to やマニュアルとなるはずのないものである。しかし、このような人がいたということ、このような物語が存在していたということは、私たちにとって確実な希望となるものである。

註 (以下であげるインターネット上の URL はすべて 2008 年 8 月 23 日段階で接続が確認されているものである。)

* 1 高等教育局医学教育課 「21 世紀における医学・歯学教育の改善方法について一学部教育再構築のために—【別冊】」平成 13 年 3 月 27 日付、
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/13/03/010331.htm

* 2 http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/sougou/main14_a2.htm

* 3 http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/17/06/05061901/gimukyoyuiku.htm

* 4 同上「21 世紀における医学・歯学教育の改善方法について一学部教育再構築のために—【別冊】」中の「医学教育モデル・コア・カリキュラム 教育内容ガイドライン」より。

* 5 <http://www.shouseikan.com/>

* 6 甲野善紀『古武術に学ぶ身体操法』岩波書店、2003、159 頁。

* 7 同上 160 頁。

* 8 甲野氏の技の展開史については、共同研究者である中島章夫氏との共著『縁の森 武術稽古研究会 松聲館の歩み』合気ニュース、1997 が詳しい。

* 9 土田昇著、秋山実写真、『千代鶴是秀写真集②』ワールドフォトプレス、2008、123 頁。

* 10 清廣とは明治期より、東京の墨田区の「本所の清廣」と呼ばれたノミ鍛冶の名人の銘である。その弟子たちによって、清廣系と呼ばれる流派が形成され、その中に嶋村は位置づいていた。